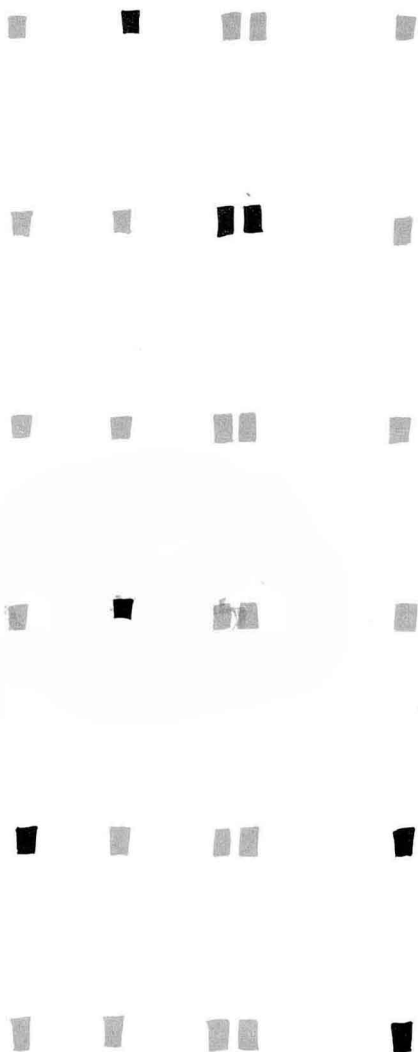


田辺聖子

貞女の日記

田辺聖子
貞女の日記



中央公論社

貞女の日記

定価五〇〇円

昭和四十六年四月二十日 初版
昭和四十六年六月十五日 再版

著者 田辺聖子

発行者 山越 豊

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一

振替東京三四

©一九七一 検印廃止

目次

武門の意気地	5
うるさがた	55
女と女房	91
貞女の日記	127
縁の切れ目	155
正義の味方	185
たのしきわが家	209
あとがき	242

装
幀
枡
折
久
美
子

小説集

貞女の日記

武門の意気地

団地があたつて野瀬周三が一ばん嬉しかったのは、妻の家族から離れられることであった。

それまでは西神戸のアパートにいた。妻の実家のすぐそばで、歩いて三四分ばかりのところ、これは妻の母親がみつけ、完成前に予約しておいてくれた新築のアパートで、周三はこういうことゝたつて不得手、妻の正子も共稼ぎのころでヒマがなく、すべて結婚支度は妻の母親の采配である。

周三は名の如く三男で、母は大阪の住吉に長男夫婦と共にいる。父は死んで居り、周三の結婚支度を按配する気働きのある人間は、周三の身内にはとりたてて居らぬ。どうしても、妻の母親の奔走にまつことになる。

妻の母親は、後家で正子たち四人兄妹を育ててきた女傑である。

長男は結婚して独立し、大阪の近郊に住んでいる。その下が正子、その次が友子で、これは神戸の貿易会社勤めて居り、末っ子の高志が、大学を出てサラリーマン一年生である。つまり、妻の母親にとっては積年の苦勞がむくわれて、人生の仕事は三分の二終ったところである。

男でもむずかしいのに、女手一つで、ここまで来た剛毅の気象は、とても、気のいいだけがとりの周三の母親とは比べものにならぬ。

周三はこの人をみるとすぐ、「刀自」といふ、いかめしい言葉があたまに浮ぶ。一家の手綱をガツキと握つて、ゆだんなく目を光らせ、手綱がもつれたり、はなれたりしそうになると大喝一声引

きしめ、あるいはピーピツとするどく笛を吹いて隊列をととのえ、活を入れる。あるいはシラガの切髪きりかみの「御後室さま」、年若いたよりない若殿のうしろに厳然と控えて、無言の圧迫と支配力で君臨している（たぶん、テレビの時代劇の見すぎらしい）、そういうイメージが浮ぶ。

尤ももつと、そういつても、決してうす汚ない老婆ではなく、この義母はむしろ美しい老婦人で、その点からもリッパすぎるのである。

彼女はずっと神戸・元町の、格のたかい洋品店で、女番頭といったふうな位置で勤めていたから、六十に手のとどく年のいまでも、背はしゃんとして洋装にハイヒールがよく似合い、化粧もうすぐ施して見苦しからず、おなじような年なのに、周三の母親とはえらい印象がちがう。

周三の母親の方は、これはもう、いうまでもなく「お袋」というイメージ、長男夫婦といざこざもなく暮している所から見ても、かなり気の折れた人のいい年寄りなのであって、「お袋」と「刀自」とでは勝負にならず、いや、「お袋」の方はそれをよいことに、周三の面倒は、妻の実家に任せきり、というところらしい。

お袋は、周三の家へあまり来ない。いや、結婚して一二度来たことがあるが、そののち、妻の実家が近いので挨拶するのがおっくうになっただけ、だんだん足を向けなくなった。

お袋は人見知りするのである。

周三の学校の父兄会だって、来たためしがない。親父の生きているうちは親父、死んでからは長兄にたよっていて、人前や社会の矢面やおもてに立たずにすんだ。そういう女だから、刀自に立板に水のよくな挨拶をされると、身も世もあらず切ながる。

それでも、周三のアパートに滞在しているあいだ、精一はい用事をしてくれたが、料理のやり方も正子の意表をつくことだらけだったらしく、

「何でも材料をザクザク切って、やたらにごった煮しやはんねん……お漬け物は丸太ン棒みたいに切ってころがしてかぶりつきやし、ビックリした、とんと兵營か飯場よ」

と、これは正子が友子にしゃべっていたのを、周三が聞いたのである。とりわけビックリしたのはお袋が周三の背広を洗濯機にほうりこんで洗っていたことで、正子は会社から帰ってひとめ見るなり、気分が悪くなって二三日寝込んでしまった。

お袋はそれでもまだ、せっせと仕事をしていった。それは周三が、正子の嫁入道具にあった、フワフワの枕では眠れぬとこぼしたからである。お袋はソバカスをしこたま詰めた枕をこしらえ、

「あんたは子供の頃から固い枕が好きやった。石あたまやから、こたえへのやろうかなあ」

と、妙なところで感心しながら、周三のあたまにあてがってみせた。しっくりと頭を支える感じがいかにも手ごたえありげで、安眠できそうで、これやこれこれ、と久しぶりに周三はホッとし、やっぱりお袋や、という気持だったが、正子はそれを提^さげてみて、

「ワア重たア！ 米袋^{こめぶくろ}みたいや」

とおどろいた。

「こんなもんで寝るのん、へえ……」

といかにもバカにしたようにいう。

「ようこんな固いもんにあたま、あてるわねえ……。なんでこっちのパンヤの枕にせえへんの？」

これ、高価い枕やったのに……」

「高かろうが安かろうが、氣に入らんもんは使われへん」

「ふーん、何か、かわってるわねえ、あんたとこ……田舎田舎してるわ」

正子は氣のわるい女ではないが、正直すぎるころがあり、遠慮、ツツシミというものがない。

取引先の会社にいたBGで、知り合ったころは、そういう正直さが、ツルンとして陰影がなく好きだったのである。小柄な可愛いらしい娘で、前歯二枚、いいかんじにいつも唇からみえており、「ごっつうええやんけ、昔居った、セシル・オーブリ、いう女優に似てるで」

と同僚に言われ、そうかいなあ、といったがそんな女優知らん、知らんが、正子の淡泊な性格がそのときたいそう好もしく思え、少々おしゃべりではあるが、それも明朗でよかった。

正子の家で、刀自にはじめて会い、向うはにこやかにしているが面接試験らしい。刀自の両側に神経質そうな会社員の正子の兄、好奇心の強そうな妹と弟が綺羅星の如く居流れて八方から周三をしげしげと見、たいへん居心地はわるかったがどうやら許可がおりたらしく、しかしあとは一切合財、先方さん次第で、たいへん気楽といえは気楽だが、

「結婚式は清寿殿、披露宴もつづけてそこで、一人あたたま×千円やから、周三さんの方がこういう金額になります。四分六の割合で花婿六分いうことになってますので……」

と計算書を出されて、周三は金を支払うだけである。面倒くさがりだから、それも結局気らくであるが、新居が妻の実家ちかく、ということに対する計算は甘かったといえる。

新婚旅行から帰ってそのまま、荷物をもってスタスタと正子の実家の方へ向うので、仰天した周

三が、

「オイオイ、何しとんねん、どこへいくねん」

と言うと、正子は呆れたふうで、

「ウチへ寄るのやないの、オカアチャン、風呂わかしてまってくれてるねん、ご飯の用意もしてるらしいわよ」

「そんならアパートで荷物おいてからいこう、どうせ近いねんさかい」

「近いから先にウチへ帰って荷物をおきましようよ、お土産かてたくさんあるし……あたし疲れたもん、早う休みたいねん」

疲れたからこそ、アパートへ帰って休みたい周三と、話ぐくいちがう。

「ウチで休みたいわ」

「ウチ、ウチでどっちがウチやねん、そんなら君だけいったらええやないか」

「けったいな人、なに拗ねてんのよ」

「拗ねてない」

「したら早く行きましようよ。オカアチャンかて心配してるし、帰って元気な顔見せてやらんと……」

そういわれると、ただいま、と声をかけるのは当然かもしれないと思ひ、また、オカアチャン、という正子の発音から、童女時代のおもかげが浮ぶようで、甘ったれなところが可愛くもある。周三は、まだ正子のいうことすることが可愛くみえたから、二人で家へいき、そうすると風呂、夕食

だ、土産ものだとは話はおそくなって、風呂上りに着るものもちゃんと、こちらの家へもって来てあり、正子のも半分の半分は実家にあるらしく、それからあとも、冬になれば冬ものをとりに走り、夏になれば夏ものをとりにゆく。着るものは刀自が管理しているらしくて、その上、妹の友子がよく上りこんで正子のたんすをかき廻しており、

「姉ちゃん、あのセーター、貸してえな、ほら、あのピンクのん……」
「またかいな」

「ええやないの、あたしのカッラ貸したげるさかい」

「セッ代出すのん、いつもあたしやないの」

と口まめに言い合いながら姉妹は自分たちのものをやったりとったりする。女ぎょうだいのない周三は、はじめはそれも面白く、正子に似てくると可愛いらしい顔立ちをした友子もきらいではなかった。

そのうちに、

「今晚はア」

とのっそり、高志がやってくる。

「兄さんカメラ貸してくれへんかなア」

周三は正直のところしぶちんであるが、そうは思われたくない。

「持っていきいな」

「フィルム入ってる？」

「カラーがほとんど使わずに入ってる」

「かめへんか、使うても」

いやという奴はいないだろう、その次には、

「どこかで車、借れんやろか」

などということになる。そうこうするうちに、周三たちも、あっちの家へいり浸りになってしま
い、第一、帰っても食事の支度をせずに、正子はテレビを見て笑っていた。

「お帰りなさい、今夜はあっちで食べるのよ」

「へえ」

と周三は坐りこんで、がっかりしたが、

「僕、お茶漬けでええけどな、ヨソへいくの、しんどいねん」

「あら、べつにヨソの家とちがうわよ、あっちもウチよ」

「ウチはこっちや！」

「こっちは何にもないのよ」

「何にも」

「あっち、何かごちそうしたらしいの、一食助かるからたべてきましょうよ」

「こっちで食べたいなあ、しんどいねん」

「ダメ！ グズグズいう人ね、ついでにあっちで風呂もすませたら？」

「そうか、それもあるか」

と周三は思う。こっちは風呂がないので風呂屋へかよっているが、これが少々道のりがあるのである。それで、いく気になってたんすをかき廻していると、

「あら、何さがしてんの、早う来なさい！」

と正子が叱咤する。

彼女の言葉は歯切れよくて強いので、ふつうにしゃべっていても叱りつける調子になって、それは一向に娘時分からかわらない。

「僕のシャツ……」

「あっちにあるわ、今日、洗濯してもらったから」

「こっちで洗濯せえへんのか」

「そうかて共かせぎで忙しいもの、干し場もないし、あっちでまとめて洗ってくれるんやもん……」

なるほど、そこもあるか、共かせぎのうちはつい、あっちの好意に甘えざるを得んかもしれへん、それもそうかいな、と周三は思う。

いったい周三は、昔からすぐ、人に言い負かされやすい欠点がある。だから子供の頃から言い合いや議論はにが手である。何でも相手のいうことに理があり、非はこちらにあるように思ってしまう。自分では貧乏性だと思いが、どうしようもない。

正子はアパートのキイを指にまきつけ、二人並んであるきながら、

「あんたは男やからわかれへんと思うけど、ほんとにこまかいこと、よう世話になってるわ、あつ